岐阜日日新聞

和田別荘（中山別荘）

球趣夢限の人びと

遠藤健三　聞き書き

＝91＝

和田邸の発見

60年ぶり現存の連絡

大正ロマンを伝える木造館

山本拙郎が技師長

「僕はこのほど、九州別府の町へ二度も出かけた。それというのも建築屋として駆け出しのころ（第⑱回参照）つまり大正八年、この町で、富士紡績初代の社長和田豊治邸の建設に従事したことがあった。当時僕は、アメリカ屋というわが国初期の洋風住宅専門の設計施行をやる会社に勤めており、僕は東京から九州へ派遣され、現場監督をやったわけだ」

◀◀ 題字は 牧野　直隆

アメリカ屋というのは明治四十二年に東京・芝区琴平町一に開設したもので、その創立者は宮崎県出身の橋口信助といった。

彼は渡米して建築学を学び、帰国して、洋式住宅の建設普及に努めた人。当初は組立住宅の輸入販売などを主にやっていたようだ。

アメリカ屋の技師長は、山本拙郎という男で、早大の二年先輩だった。彼は野球が好きで後年、岐阜商業野球部の松井君時代にはいろいろアドバイスをしてくれた人だった。（第⑱回参照）

アメリカ屋という僕が学窓を出て初めて勤めた会社は、要するに住宅の洋風化をやり、床の間に畳を置き座る生活から、イス、腰掛、テーブルによる生活合理化を呼び掛け、そのために社長の橋口は住宅改良会というものを大正五年に作った。その機関誌として〝住宅〟というわが国最初の住宅専門雑誌を創刊したが、母体の住宅改良会の顧問には東京帝大教授の塚本靖、佐野利器、東京高等工業学校教授の滋賀重列、前田松韻といった当時の建築界の面々が並んだ。そして雑誌の主筆、編集は山本拙郎が当たっていた」

とんがり屋根の家

「アメリカ屋での仕事は、東京三田綱町に建てた浅野良三邸とか軽井沢に量製業の研修所を造ったり、根津嘉一郎の別荘を建てる現場へ僕は出かけたりした。その後この大分県別府に和田豊治さんの別荘を建てることになったわけ。

アメリカ屋の建物というのは、要するにとんがり屋根にバンガロースタイルの米国式木造住宅で、大正期に建てた洋風木造建築としてはなかなかしゃれたもので、大正文化の一つの典型だと僕は思っている。

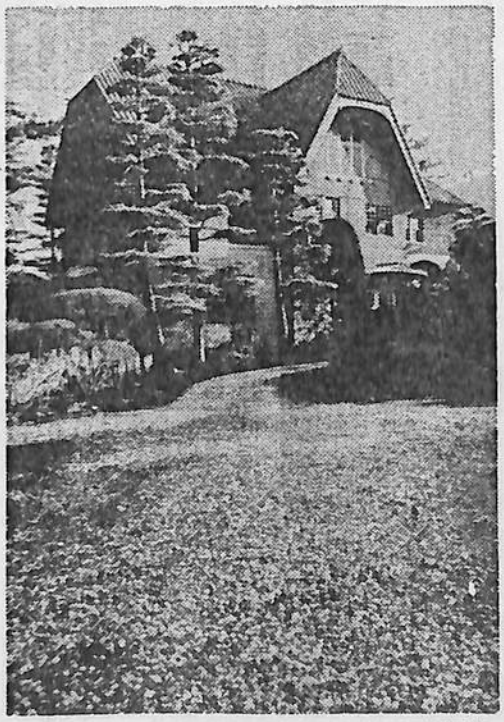
若いころ、九州での生活は僕の青春時代でもあるわけで、ことに印象深く、和田邸の旅宴は情熱を注いだ。東京から六、七人の大工とトビの者二人がここに来て飯場を建て現地採用の人たちと作業をやった。四千坪ほどの土地に池をめぐらした庭園の中に、例のとんがり屋根の百八十坪ほどの別荘を建てたわけだが、材料など、ほとんど東京から直送し、かなり凝ったものだった」

木造建築に日の目

「一年がかりで、この別荘は建った。その宿舎としてこの和田邸が使われ、その建物の管理と保全を僕にやってくれと頼まれたが、大役でした。

これまで東京や、軽井沢などかなりその洋風建築に関係したわけだが、関東大震災と戦中の空襲に遭いやられてしまった。

そこであの若いとき別府で建てた和田邸は現存していないだろうかと考えたわけだ。それからもう一つ、昨年暮れ、雑誌〝新建築〟の臨時増刊号に一私の発見した建築家一というタイトルで、僕が昭和九年に建てたチューダー風の渡辺英吉邸を評論家の藤森照信さんが取り上げてくれた。その折に、アメリカ屋建築を最近研究している学究がいるよと教えられて、ホーと思った」



別府市内に現存する元和田豊治邸＝藤田洋三氏写す

湯煙の町を探す

「僕らのやったアメリカ屋の建物を調べている学者がいると聞いて、それなら一つ、わが思い出の別府の和田別荘はどうなっているか確かめたいと、この三月、家内を伴い別府へ行き、町を歩いた。

なにしろ六十年も前のことだ。別府の通りは外国へ行ったような感じがしたが、さすがに湯煙りと高い山々に囲まれた海岸町の自然美は変わらなかった。

山の手の辺りの昔の面影を探して歩いたがそれらしい所はない。たまたまホテルで別府ロータリーの例会があることを聞き、そこで会員の建築家後藤邦義氏に、いきさつを伝え、願わくばロータリーの友情をもって和田邸の消息を調べてほしいと申し上げて、岐阜へ帰ったことがあった。

それからしばらくして、ある日大型の封筒が別府から届き、あけて見てびっくりした。なんと六十年前に僕らが建てた和田豊治邸が目も覚めるばかりに建っている写真が出てきた」

「僕は間もなく八十四歳だ。いろいろな事があったが、今年はありがたい年で、思わぬうれしい因縁に出会い驚いている」

（完）